
クローバー

新川四葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバー

【NNコード】

N4489P

【作者名】

新川四葉

【あらすじ】

主人公、桜川優紀（女）が男として葉山学園に入学してから、1年が過ぎた。

無口、真面目、先生からの信頼も厚い生徒会副会長の優紀に2年の春転機が訪れる。

始業式。優紀のクラスに転入生がやってきた。彼女の名前は上木楓。美少女なのに普通の女の子とは何か違う…本当の楓の姿とは…？ 優紀の運命は、楓との出会いで大きく変わり始めた…

-プロローグ-

私立葉山学園（はやまがくえん）に入学してもう一年が過ぎた。

中学でのあの忌まわしい過去も忘れるくらい俺は充実した生活を送っていた。ただ一つを除いては…

「ふう〜。これで入学式の準備も終わりか…」

俺は生徒会副会長をやっている。生徒会長ほど目立たず、ほとんどどの仕事が生徒会長のサポートと雑用。

生徒会長とは仲がいいし、それにはあまり人の来ない生徒会室が好きだった。

「ノンノン…

「はい…」

「よしー副会長おつかれさん」

生徒会室に入ってきたのは俺の兄貴でこの高校の教師の桜川慎哉（さくらなかいしんや）である。

ちなみに生徒会の顧問もある。

「なんの用だよ。」

「冷たいなあ…。せっかく妹の優紀（ゆうき）の頑張りを見に来たつていうのにー…。」

「……」

幸い今日は春休みで生徒会役員も俺を除いては誰も来ていない。

「はあ～。もう、お兄ちゃん…学校でこの話はダメっていつたじゃん…」

「はは…」めんじめん。たまには学校でも女の子扱いしてやったくなつてな。」

実は…私、桜川優紀（さくらかわゆき）は女であるにも関わらず男としてこの学校にいる。

このことを知っているのは兄の慎哉とお父さんのお兄さんにあるこの学校の理事長だけである。

あたしは、中学時代クラスのリーダー格の女子が好きだった男子と仲がいいといつ理由だけで女子からいじめられ殺されかけた。

明るかつた性格も変わり女子恐怖症になつてしまつた。

そんなあたしを近くで守れなかつたといつてお兄ちゃんは自分のいる高校に男として入学しないかと誘つてくれた。

理事長も事情を説明したらあつたりOKしてくれて今あたしはここにいる。

「一年はつまく過ごしたみたいだな。成績は優秀だし、生徒会副会長としても先生の評判もいいぞ！」

クラスでは、ほとんど本を読んでて女子とは関わりがないし周りからも副会長は真面目すぎるでつまらないっていわれるくらいだし…

田立ちたくないあたしこうひはいれへりこでいいんだけどね。

でも、生徒会長で同じクラスの智（とも）とは話も合ひ仲がいい。

それに、女としてここに入れてたら付き合いたくないからここに…

たぶん、あたしは智の事が好き…

「…あ、おこ…」

「えつ…? なに?」

「俺の話聞いてたか?」

「…」めーん。聞いてなかつた。

「つたぐ。始業式の日、お前のクラスに転入生が来るから。先生たちの推薦でお前にしばらく面倒を見てもらいたいらしいんだが…」

「ん~。いいけどなんか問題あるの?」

「それが、女の子なんだよ。女の子なら女子に面倒見させればいいんだろうけど…この学校広いしいいろいろ教えるには生徒会長より副会長のお前について…真面目で言つたらお前の方が先生の評判いいからな!…でも…女子と関わりたくないから断つてもいいんだぞ。

「

中学でのこと」が頭をよぎった。

でも、あれから結構たつたし今は近くにお兄ちゃんもいるしあたしは「」の話を受けることにした。

「やうやく乗り越えなきやいけない頃だと呟つてたし、あたしやるよーお兄ちゃん。でも、辛くなつたら相談乗つてねー！」

「当たり前だろーかわいい妹のためだ。それじゃあ、おまえの担任に伝えておくから。それから、今日の晩ご飯カレーでよひじへー！」

「わー。本当に田舎はやつちなんじやんーー！」

まったくお兄ちゃんのカレー好きにはあきれる。

さつさとあたしは残りの仕事を片付けてカレーの材料を買つて帰宅した。

この会話を聞かれてるとも知らず。

「ふーん。面白いく」と聞いていた。これから楽しくなりそう。

-プロローグ -（後書き）

今回、初めて執筆したので読みにくいところなどもあると思いますが、最後まで読んでいただけたら嬉しいです。よかつたら感想お願いします。

・出会い・

始業式。

この学校はクラス替えや担任が変わることがないからみんな見慣れたメンバーだ。

だから今年も智も一緒にだし。

「おはよー! 智」

「ん? おはよー 優紀」

「早速、寝坊かよ! 今日始業式なのに」

「仕方ないじゃん、春休み遅寝遅起きだったんだもん。体が慣れなくて…ふあ」

こんなたわいのない話をしてる瞬間が一番の幸せだった。チャイムが鳴り、担任が教室に入ってきた。

「おはようー! みんな今年もよろしくなー! 今日は転校生を紹介するぞ。入れ上木」

そう言られて入ってきた転校生をみた瞬間… クラス中が大騒ぎになつた。

「まぢかよー! チョーかわいいんだけどー! …」

「キャー・キレイ」

教室に入ってきたその子は今までに出来たどんな女の子たちよりもキレイで可愛かった。

女であるはずのあたしでさえしばりく田が離せなった。

「おまえら静かにしるー上木がビッククリするだる。『めんな上木うるわこやつりで』

「あーせんせ。ひどいなあ」

「せり、上木に血口紹介してももうから静かにしるーーほり上木自己紹介」

そうこられて黒板に名前を書いて

「上木楓（かみきかえ）です。諸事情でこちらに転校してきました。あ、あたし見かけによらず結構サバサバしてるので気軽に話しかけてくださいーーよろしく。」

その言葉通り見た目に反してちょっと野の子っぽさもあるような気がもした。

少し違和感はあったが、その時はそんなに気になることではなかった。

「ヤーだ、副会長ー」

「はーー。」

「話は聞いてると思つが、じばらぐの間上木の面倒見てやってくれなー学校案内とか」

「わかりました」

「じゃあ席も副会長の隣な」

その時クラスの男子が

「副会長いいなーーせんせオレじやだめなのー?」

「お前らにこんなかわいい子の面倒なんて任せられぬか!それに他の先生たちも副会長を推薦したんだよー。」

クラスに笑いが起きた…そしてみんな「副会長が適任に決まつてんじやん!」と口をそろえた。

「ちえつ仕方ないつか。副会長なら真面目だし譲るかーあつー副会長抜け駆けはダメだからねー。」

「えつーそんなこと…。」

あたしはビックリした。

クラスでこんな話をする口が来るなんて思つてもいなかつたから…

「こんな」とを考えてたら、隣に上木さんがきた。やっぱりカワいい…

「えっと……副会長？ よろしく！」

といつて握手をされた。

「あつ。うそ。よろしく」

「いきなりなんだけど、今日の放課後さっそく学校案内でもうれるかな？早く慣れたいからさー時間空いてる？」

「大丈夫だよ！でも、生徒会室にちょっと顔出さないといけないから少し待つてもらつけど大丈夫？」

「大丈夫！－じゃ教室で待つてるから」

授業が終わり休み時間になると上木さんの周りには人の群れができる。

噂を聞きつけた他のクラスの子たちも見に来ていた。

それに上木さんは言つてた通りサバサバした性格ですぐに友達も出来ているようだった…

「俺が面倒見なくてもいいんじゃね…」と小さな声で言つた瞬間、智の声がした！

「なあ優紀。上木さんすげえな」

「……！」

「優紀も上木さんみたいなのがタイプだつたりすんの？」

ビックリした…

「ん~。確かにかわいいとは思つけど今は女の子に興味はないかな。
お前は?」

「俺はめっちゃタイプ!」

「え? ー?」

「なんでそんなに驚くんだよ。俺だつてそろそろ恋したいじゃん?
まさか…智がそんな」と言つなんて思わなかつた。あたしは必死に
動搖を隠すように言つた。

「じゃなくて、」の前の子彼女じゃないの?」

「あああの子!違つよ。落ち込んでたから慰めてただけ!」

智が彼女を作らない」とは知つていたから慰めてただけってのも本
当は知つていた…

智は、みんなから慕われてるし実行力あるしかっこい。

男女がまわづ優しいから、女の子も智に近づいてくる。

だから、付き合つてると勘違こられることが多々あるナビ、女の子
と付き合つことに関してはすぐくじつかりしてゐる。

でも、やつきの智の言葉が気になる…上木さんと付き合つたら美男

美女のカップルだな。とか思い上木さんにちょっと嫉妬してしまつ
‥「まだ‥」女の子に戻りたいって思つてしまつ自分がいる。

智といふとたまにこんな感情が湧き出でくる。

でも、あたしはこの学校卒業するまではこの『保持は封印するつて
決めたから‥‥

まつ、それに男としてここにいる以上恋は出来ないだりひせび..

- 本性 -

放課後、生徒会室に顔を出して教室に戻ってきた。

下校時間を少し過ぎたから校内に残る生徒もまばらで教室には上木さんしかいなかつた。

「お待たせ。遅くならないうちに帰らせたいしもつ行こー。」

「うそ」

広い校内を一周しながら案内をした。

教室ではあんなに元気だった上木さんはあたしと一緒にだと口数も少ない…

やつぱ真面目に見えるから話しこ��이のかな…とか思つてたらいきなり

「あのさあ、副会長なんぞ男のふりしてんの?」

一瞬耳を疑つた。それを知つてんのはお兄ちゃんと理事長だけ!

「何言つてんの上木さんー俺どいつ見ても男に決まつてんじゃん」

と動搖を隠しつつ普通に返した。なのに…

「実は…春休み生徒会室の前で副会長と先生が話してんの聞こちやつたーあれ副会長だよね?」

あの話を聞かれてた！！

「ち、違うーー！」

「嘘つかなくていいよ。俺一度見た人の顔忘れないから」

てことは完全バレてんじゃん…でも確認はない。

「確認なんだけど…どこから聞いてたの？」

「ん~。全部！先生が中入つてくの見てたし」

だつて、だつて…あの周囲には誰もいなかつたしあ兄ちゃんだつて何も言つてなかつた。

あたしの頭の中は混乱していた。

1年間誰にもばれずにやつてきたのに、しかも転校生に知られるなんて…

しかも、こんなことばれたらもういられない。

実家に帰つたらあいつらがいる学校に戻らなきゃいけなくなむ…

「頼む。それだけは黙つてくれないかなーー！」

あたしはすがる思いで上木さんに頼んだ。なのに、返つて来た返事は信じられないものだった

「じゃあさ、交換条件ね。黙つてる代わりに、副会長。俺と付き合わない？俺、男なんだよね」

「…………」

あたしは言葉を失った。いま、なんて言った？おこと…？つきあつ…？

「こま、なんて…？」

「何つて。俺、男だし。副会長、女じやん！…だから付き合つてよ！俺、副会長に興味もつちやつた」

あまりの驚きにあたしは男のフリをしてるけど、これが学校であることも忘れて叫んでしまつた。

「はあ？あんた何いつてるか分かつてんの！？てか、大体今日会つたばつかのあんたと付き合えるわけないじやん！…大体なんで男なのに女の格好してんのよ…」

「あれ？副会長こんなキャラなんだ。」

上木は楽しそうな笑みを浮かべてこちらを見つめる。

こいつ絶対あたしで遊んでる。いんやつなんかと付き合つなんて絶対あり得ない。

「第一あんたも女装してるんだしばれたり退学だよー。」

「別にばれても前の学校戻るし。ばれたくないのは副会長でしょ？」

ああ、完全に弱みを握られた……。

「……でも、あたしはあなたとは付き合わない

「じゅ、副会長が俺にキスしてくれたらあきらめるし、ばらさない

「……」

「信じられない……キスだってまだしたことないのに……しかもこんなに…

「しないのー? ジャッキー！」

「悩んだ末……あたしはバレて実家に戻ることよりキスを選んだ……乱暴なキス。初めてだったのに……

一瞬、智の顔がよぎり涙が出そうになつた。

「これでいいでしょ……もうあたしに関わらないで……」

あたしはその場から逃げるよつと去つた……

時は少しさかのぼり。春休み。

俺は上木楓。性別は男。

前の学校がつまんなくて高校2年から近所の姉ちゃんが先生している葉山学園に無理やり転入させてもらつた。

しかも、『女』として。だつてその方がおもしろいじゃん！

今日は転入手続きで学校を訪れた、広い校内で職員室を探していく迷つた俺はとりあえずひらひらしながら職員室を探していた。

その時、生徒会室に先生らしき人が入つて行つたのを見た俺は職員室の場所を聞こうとした。

生徒会室の中には先生と少し華奢な男子生徒がいた。

話が終わつてから声をかけようと思つて入口近くで待つことにした。

すると中から気になる言葉が聞こえてきた…

「なんの用だよ。」

「冷たいな…。せつかく妹の優紀の頑張りを見に来たつていつの間に…。」

ん？

今、妹つて言葉聞こえなかつたか？

俺の頭に疑問が湧いた。

わざわざ見たとき生徒会室には先生と男子生徒しかいなかつた：

この疑問を知りたくなつた俺は中の2人の会話を盗み聞きしてしまつた。

……

やつぱり、この男子生徒は『女』で、しかも、面白い」と転入生の俺の面倒を見てくれるらしい。

「ふ〜ん。面白い」と聞いたらやつた。これから楽しくなりそひ。」

先生が出てくる前にその場から少し離れた。

そして生徒会室から出てきた先生にいかにも今来たかのように声をかけた。

「先生ですか？」

「やうだが、キミは？」

「あたし、今度転入することになつた上木楓です。転入手続きで来たんですけど迷っちゃつて職員室まで案内してもらひますか？」

「ああー話は聞いてるよ。」

「うだ

俺は職員室まで案内してもらつた。始業式が楽しみだ。

-始業式。

あこがれいつもやつに俺は春休みのあの話の張本人の横にいる。

なんかいかにも副会長って感じの真面目。今日は眼鏡もかけてるし余計そう見える。

放課後、校内案内を頼んだからいじめてやれりと思つ。楽しみだ。

休み時間はクラスのやつらが俺のまわりに集まつてくる。

昔から、顔もいいし人気だつたけど女としてもいけるんだな。とか思つていた。

ふと、副会長の方に目をやると、なんか難しそうな本を読んでいる。

友達少なそうな雰囲気だな。とか思いながら放課後まで過ごした。

-放課後。副会長が俺のところに来た。

「今から生徒会室行つてくるから少し待つてて。10分くらいで戻る。」

そう言い残して行った副会長の横には、副会長の性格とは正反対な

男がいた。

話に聞くと「この学校の生徒会長」らしい。

俺は2人を見ていたその時、生徒会長と話していた副会長の笑顔を見た。

「……」

なんだ、あの反則的な笑顔！？

男だつて思つてたら氣付かないけど、実はめちゃくちゃかわいいじやん／＼

俺は副会長が戻つてくるまでその顔が忘れられなかつた。

……

「お待たせ。遅くならない」「ちと帰らせたいしもう行こー。」

「うそ」

わつきの笑顔をまた思い出してしまい。俺は話が出来なかつた。

副会長も今は真面目な感じに戻つてるし……てか、そもそもこの子はなんで男装してゐるのか？

俺の頭の中は副会長のことでいっぱいになつていて。

そして俺の口は思つてたことを口に口にしてしまつた…

「副会長なんで男のふりしてんの？」

副会長はかなり驚いてる。

しかも、『ぱりされなによつにすつ』必死だし。

俺は副会長の反応が楽しくて自分が男である」ともぱりしてしまつた。

しかも、「付き合つて!」まで。これには自分でもあとから驚いたんだけどさ。その時、

「はあ? あんた何いつてるか分かつてんの? てか、大体今日会つたばっかのあんたと付き合えるわけないじゃん!! 大体あんたもなんで男なのに女の格好してんのよ!」

俺は驚いた。

こんな真面目な副会長演じてるからもつと静かな子かと思つてたら結構言ひじゃん!

でも、俺としてはこっちの方がよかつた。いかにも女つてのはめんぢくわいし…。思わず笑みがこぼれてしまつた。

あつーいこ」と思つた。

キスしなきや付き合つて!とすれば嫌でも付き合つてくれるだらうつつて。

我ながらいいアイテイア！

「じゃ、あんたが俺にキスしてくれたらあわらめるじ、ばらかなこ

「…」

泣き声の言葉が出てくると囁いた瞬間。

俺の唇に向かがあつた。やわらかい？

俺は理解するのに少し時間がかった。まさか…キス…！

予想外の展開に俺は困惑した…しかも去つてたその子の田には涙
？が見えた気がした。

あわらめるって言ったのに俺はあわらめられない気がした。

「副会長…いや、優先。おもろこやは俺の女にしたい。

・休日・

今日は土曜日。

昨日あんなことがあったから正直学校あつたら休んでた。

ばらさないって約束で、キースしちゃつたけど保障はないしね。

月曜学校行きたくないな…

「…優紀？具合悪いのか？」

お兄ちゃんが心配して部屋まで来てくれた。

でも、さすがにお兄ちゃんにも昨日の事は話せない。

「うん。大丈夫。」

「俺、今日も学校で仕事あるから行くけど、なんかあつたらすぐ連絡しろよ！」

「うん。今日、気分転換に出かけてくるね。」

「わかった。気をつけろよ！』

お兄ちゃんは学校に行ってしまった。

こうこうう氣分が沈んでる口は、久々に女の子の格好して買い物行こう。

そつ思つたら、気持が少し軽くなつた。

「よーしー・メイクして買い物行くぞ！…」

我ながらこいつ切り替えは得意だな。

中学の時はできなかつたのに…いつちきても兄ちゃんや姉に会つてからかな。

「よし、バッヂリー鍵も閉めたし。行つてきます。」

……

「ふう。いっぱい買い物して楽しかつた。晩ご飯の買い物して帰ろ
うかな」

今日は、シーフードカレー。

また、お兄ちゃんのリクエスト。

2週間に1回はカレーなんだもん。ちょっとあきひやうな。とか、
考えながらスーパーを回つてると…

「ちよつと一楓！聞いてる？」

「えつ…！？」

今、一番聞きたくなかった名前が聞こえた…

楓！？

たしか、あいつの名前も楓。

おそるおそる声の方を向くと、格好は男だけどあの顔は忘れてても忘れないあいつだ！！

しかも、一緒にいるのはうちの高校の日向先生…

「晩」飯何がいいか聞いてんの…！」

「別に何でもいいし…てかなんで俺こなきゃいけねーの？」

「荷物持ちに決まつてんじやん！か弱いレディーに重いもの持たせる気！？」

「どこのがか弱いんだよ…！」

えつ…？どういう関係？

あたしの頭は混乱していた。

そして、男としてのあいつの姿にうかつにも見とれてしまった。

だって、学校一かつての智に負けない。いや、むしろそれ以上…

その時！

「あれ！？日向先生じゃないですか？」

声をかけたのはお兄ちゃんだった…！

「ううん、さっきお兄ちゃんからメール来てスーパーで買い物してるって返したんだった…」

「ほんばんは。桜川先生。珍しいですね！」

「ああ、晩ご飯の買い物にね。たまに来るんですよ。やぢらは田向先生の彼氏ですか？」

「ちゅうとお兄ちゃん何聞いてんの？てか、上木だつて気付かないの？」

まああいつが女だつて信じてればわかんないか。

にしてもズバツと聞きすぎ…

「違いますよ。歳離れてるけど一応、幼馴染ですね。彼氏にするなら、桜川先生みたいな大人な方がいいですわ。」

「えつ／＼／＼

お兄ちゃんお世辞なのに真に受けてるし…

でも、たしかに田向先生は年下相手にする感じでもないし、幼馴染でこの学校に通うために一緒に住んでるとしたら納得できる。

なんて考えてたら、上木と一瞬田があった気がした…

「ヤバッ！」

あたしはその場から急いで去り買い物を済ませ、お兄ちゃんに連絡してすぐに帰った。

～楓サイド～

ん？誰だ？

田向と桜川先生を見ていたことはいつの学校だらうな。

でも、クラスにはあんなかわいい子いないし、てかいたら俺が見逃すわけない…

ふと一瞬その子と田向が合つた。

その瞬間その子は逃げるよつて行つた…なんでだ？

でも、なんか気になる…

「…っ…まあか…！」

そこへやあいつ桜川先生の妹だし。

先生がここに来たのも偶然じゃないとしたらやつぱり！

俺はすぐに追いかけ探した…でも、見つからなかつた…

「まあかよ。あんなにカワイイなんて…／＼／＼

俺は帰つてからも優紀の姿が忘れられなかつた。

田向から、優紀、いや…副会長の話を聞いた。

でも、やっぱり眞面目で頭がよく先生の評判がいいぐらしか聞けなった。

こんなに女に興味を持ったのは初めてだつた…

「はあ。」

月曜日になってしまった..

土曜日に楓の男の姿を見てから楓のことがまづかつ考えてくる。

ううん。ダメだ！あこいつは危険すぎる。

それに、あたしは智の事が好きーー

あたしは、好きって気持ちだけは…じゃなこと

付き合えなくとも気持ちだけは…じゃなこと…

てかちよつと待つて！

智は楓のことをになつてたんじや…

ううう。なんか複雑すげー。

といつあえず「楓はダメ、近づかないで」って智に任せられとなへ言おうなんて考えてたら

「優紀、俺先に学校行くぞーー！あんまりぐずぐずしてると遅刻するわー！」

「うんーーあたしももう少ししたら行くーー行ってらっしゃーー！」

「いっときま～す」

学校にも兄妹だつてことは隠してゐからいつも学校に行く時はバラバラ。

「ご飯を食べ終わり、あたしは男子制服に着替え、学校用の眼鏡をかけた。

髪は少し長めだから顔は隠れるし女だつてばれる事はまずない。

「よし、じゃ俺も行くか」

あえて、俺、とこつ言葉を口元じてあたしは学校に向かつた。

学校に着くと、あたしの男装のことばれてない様子だつた。

ひとまず安心。

でも、気になることが一つあつた。

智がすでに学校に来ている…でも席にいない。

にしても、智がこんなに早く来るなんて珍しい。

あたしは自分の席に向かつた。

あたしの席に誰かが座つてゐる…えつ？智…しかも、智が話しているのは楓！

「なんで…」

智があたしに気付いた

「おつー！優紀おはよーーー。」

「ああ、おはよ。おまえなんで俺の席にここんだの…」

「楓ちゃん」と話したくって、今すぐ

「ああ、もう。」

楓もあたしに気付いた。

「あつー！優紀君おはよーーー。」

はつー？

今、優紀君つて…

あとはみんな「副会長」「つて呼ぶのは智とお兄ちゃんへりー。この学校で優紀つて呼ぶのは智とお兄ちゃんへりー。

あとはみんな「副会長」「つて呼ぶ。

しかも、この前まで楓も「副会長」「つて呼んでたじちゃん。

一体、何たくらんでんの？

あたしは聞こえなかつたフリをしてそのまま席に座り、本を読み始

めた。

「優紀君、なんか怒つてるのかな?」

楓は智に聞いていた

「優紀があいをつられて返事しないことはないから、たぶん聞こえなかつたんだよ」

智は楓にそつこない。楓と楽しそうに話を続けた。

楓と仲良くする智にけりと苛立けりつ…

でも、やつぱり、女装姿の楓は男とは思えないくらい美人だ。とか思つてしまつ。

智が惹かれるくらいだし、あたしは智には釣り合わないな。なんて思つて悲しくなつた…

授業が始まつて、しばらくなつと楓から小さく折られた紙を渡された。

相手にあるつもつはないが一応開いてみた。中に書かれてたのは…

「土曜、スーパーにいたでしょ?」

「…ひー…」

あたしは思わず声を出しきくなつてしまつた。

やつぱり見られた…てか化粧もしてたし女の格好してたから絶対に誰にもばれないと思ってたのに。

よつによつて、またここに…

あたしは、その手紙をすぐに丸めて机の隅において休み時間に捨てた。

もう、楓には関わらないって決めたんだから…！

幸いにも、休み時間や昼休みは楓のまわりに人だかりが出来るからあたしが楓と関わることはなかった。

-放課後、あたしは智と生徒会に行く準備をしていた。その時

「優紀君！少し時間いいかな？」

楓が、声をかけてきた。

「あつ。ごめん、今から生徒会な…」と言い終わる前に智が、

「ええ、楓ちゃん。俺にじゃないの？」

と智が言った。

「智、おまえは生徒会行かなきゃ…！上木さん悪いんだけど俺も生徒会あるし今日は」「ごめん」

つて言つて逃げ去つとした

「楓ちゃん急用やつだし、優紀話してやれよ。生徒会は先やつてるからー。」

「あ、智…。」いつときの智の優しさが辛いな。

智にいつ言われたら断れなくなる

「わかった。じゃ、智、先に進めてくれ」

あたしはそう言つて楓の話を聞くことにした。まじ、気が重い。あの手紙の事かな…

誰もいない教室に戻りあたしは口を開いた…

「…で、何？」男口調で聞いた

「優紀。わたくしの手紙みたっしょ？」

「やつぱり、やつだつた。『違つて』つて言つてましたとき、ん？優紀？」

「楓！なんで呼び捨てなの？てか、名前で呼ばないでよ

「え～なんでえ。智君は名前で呼んでんじゃん

「智は特別ー。」

「じゃあ、俺も特別にして。てか優紀も、俺の事名前で呼んでんだ
しいいじゃん」

「……」

うかつにも、楓のこと名前で、しかも呼び捨てにしてしまった：

あの事件以来「上木さん」なんて長いから「楓」って頭の中で思つてたことがつい出てしまった…

「『ホンッ！上木さん…話つてそれだけ？俺は土曜ずっと家にいたよ。じゃあ俺は生徒会に行くよ』

「ちゅっ、待つてつて！話まだ終わってない！」

その瞬間、あたしの腕は楓につかまれ、楓に引き寄せられていた。

楓が近い…／＼あたしの体は固まり、動けなくなっていた。

「な、なにすんの…？」

楓はあたしの眼鏡を取つた

「あの時のやつは優紀じゃん…。おれがあんなカワいい子間違えるはずがない…」

「……」

今、なんて言った？

カワイイ？

あたしが？

顔がさらに熱くなるのがわかり、頭が真っ白になった。

あたしは、楓から眼鏡を奪い、突き放して生徒会室にかけていった。ドンッ。鈍い音がした。

「…いった…。でも、近くで見るとまちかわいい…。」

後ろですごい音が聞こえた。

でも、そんなのかまわずあたしは走って去った。

生徒会室に入る前に着いてもまだ動搖していた。少し気持ちを落ち着かせ何もなかつた様に入つて行つた…

「遅くなつてごめん。」

生徒会役員はまだ集まつてなく、いたのは智だけだった。

「あれ？ 優紀、早いね。もう話いいの」

「ああ、どうでもいい話だつた」

「ふうん。ねえ、優紀。俺まだ楓ちゃん好きになるかも」

「まあ、頑張れば…」

心になることを言ってしまった。

さつきの楓の「かわいい」って言葉が頭から離れなくて智の言葉が入っこなかつたからだ。

・生徒会が終わり、門を出て反対方向の智と別れて帰宅した。

少し歩くと学校のすぐ近くに公園からブランコをくぐる音がする……

この時間は、夕飯時だし子供もない。

珍しいなと思つてさつきと田代をやると、うかの高校の制服をきた女子がいた。

まあ、高校生なら別に心配ないかと思つて歩き出した……

「……さつきーー！優紀ーー！」

「えっ！？」

あたしが後ろを振り向くと楓がいた。

「なんであなたがいんのー？てか、帰ったんじや？」

暗くてよかつた。

楓だと思った瞬間、さつきの出来」とが頭をよぎり顔が熱くなつたのが分つたから…

「あー。さつきはいきなり『めん。謝りたくて優紀待つてた。あのスーパーで見たから家にしつちだと思つて…』

春だといつてもまだ肌寒い。

それに、あれから3時間以上は経つてる。

しかも、あたしが歩きだなんて知らないはずなのに…

楓にはもう、関わらないって決めてたのに…あたしの気持ちはおかしくなつていた…

「…いいよ。てか、あたしこそ突き飛ばして『めん。けがしない?』

「えっ！？ああ大丈夫…」

楓は驚いた顔をしていた。

あたしだつて、驚いてるよ。

自分がこんな奴の事心配してるなんて…

でも、こっちにきてお兄ちゃん以外に女の子扱いされたのは楓が初めてで、しかも謝るだけの為に何時間も待つてたなんて思いもしなかつたし、気が動転してたんだと思つ…

「あのさ、俺、優紀と付き合いたいって言ったの本気だから…もう一度考えてみてくれない？だから、今週の日曜俺とデートしてほし

い！」「

あたしは、声が出なかつた。

本氣…？でも、今の楓からは本氣だつてこののが伝わつてくれ…

「…わかつた。じゃあ日曜10時にココでいい？」

自分でもなぜこんなことを言つてしまつたのかわからなかつた。

でも、ちょっと楓の事を知りたかったんだと思ひ…

「…えつー？まぢでー？やつたー？…優紀、女の格好で来いよなー！」

「…ー！」

あたしは、小走りになづくとその場から走つて家に向かつた。

その次の日から、木曜日までは何事もなかつた。

月曜の出来事が嘘じやないかと思われるぐらいに…

楓は、すぐに友達が出来ていつの間にかあたしが頼まれた面倒係も必要なくなつていた。

智は相変わらず、楓にべつたりで話をしている。

あたしは楓が男であることを知つてゐるからなのか、それとも楓に惹かれているのかわからないが、智と楓が一緒にいることがそんな

に気がにならなくなつた…

金曜日の放課後、あたしは生徒会室に向かっていた。

その時、前に楓がいるのが見えた…

あれ以来言葉も交わすこともなかつたあたしはなぜか緊張してしま
い下を向いてしまつた。

気付かないふりして通り過ぎようつと思つたのに…

「日曜、忘れんなよ…」

楓は小さな声でさう言い残していつた。あたしは、また顔が熱くな
るのを感じた。

なぜか日曜日が待ち遠しくてたまらなくなつた…

（楓サイド）

月曜。公園から帰つて家のベットに寝転がつた…

「早く日曜にならないかな…」

俺は帰るなりもつと日曜が待てなくてしょうがなかつた。

まさか、優紀がデート〇〇してくれるなんて思わなかつたから。

それに、また、女の姿の優紀が見れるのが嬉しくてたまらなかつた…

次の日から優紀と話して「やつぱ、なしこじょつ」とか言われるのが怖くて俺は金曜まで優紀に話かけられなかつた。

それに友達もできたから、俺の面倒係も頼みにくくなつてたし…休み時間は俺の周りには誰かしらいた。

特に最近は智がよく話しかけてくる。

たぶん、俺に好意を抱いてるとはわかつてゐるけど、さすがに男に興味はねえーから適当に相手していたけど、優紀の唯一の話相手だった智を奪つたよつた気がして申し訳ない気がしていた。

「最近あいつ笑わないな…」

俺は優紀の事しか考えなくなつていた。

授業聞く姿、本を読む姿はみるとやっぱりかわいいなあと思つてしまつ。

たぶん、女の格好をしてたら男どもが寄つてきそうだなとか、優紀が男装しててよかつたとか考えていた。

金曜の放課後、職員室から教室に戻る途中、優紀が前から歩いてきた。

明らかに俺の顔を見て下を向いた。そんな姿もかわいくてしょうがない…

「日曜、忘れんなよ…」

俺は日曜優紀が来る」とを願いながらそつそつと語っていた。

-初デート-

「…寝れなかつた…」

時計をみると6時。まだ約束の時間まで4時間もある。

でも、あたしの胸はドキドキが止まらなかつた。

早く起きたもお兄ちゃんが不思議がると思つて、とつあべず部屋で今田の服を選ぶことにした。

「…楓、どんなのが好きかな?」

無意識に言つていたことに後から気付き恥ずかしくなる… ／＼／

気付くと一時間が過ぎてこた。

「つわい…」

あたしはコソシングに向かつた。お兄ちゃんが朝、ほんの皮度をしてくれた。

「おはよつ。お兄ちゃん」

「おはよつ優君。ただ、お前今口なんか予定あるか?ないなりお兄ちゃんと出かけない?」

「おはよつお兄ちゃんはこつも戻遣つてくれる。でも、今田は…

「「」あん。今日は約束があつて…晩」「」飯までには帰つてくわから」

「やつか。わかつた。じゃ俺は一日部屋でのんびりしてよつかな

あたしは、「」飯を食べ部屋に戻つた。

シャワーを浴び、こつもよつ女の子に見えてる髪もセミドライシメイクをした。

服は先週買ったばかりの新品。

「よつ…」

時計を見ると9時半を過ぎてゐる。急がなわや…！

「お兄ちゃん。行つてもまーす…」

「ああ。行つてらっしゃい。…ん？優紀、なんで女の格好してんだ
？約束なら学校の奴だろ？」

お兄ちゃんの言葉なんて聞こえてなかつた…

「はあ。はあ。…」

着いた。

時計を見たら5分前。間に合つた…まだ、楓は来てないみたいだ。
よかつた…

時計が10時をまわった。

「あれ？おかしいな…。約束は10時だったよね？」そんなことを考えながらもう少し待っていた。

「アド、聞いておけばよかつたな…」

その時…

「優紀……」めん。遅れた……」

「ほんと、遅いよ…！」

そう言つて声がした後ろを振り向くといつもとは違つ、本当の楓がいた。

カツコいい… //

でも、口にしない。そんなこと言つたら、楓が調子にのっちゃつ…

沈黙が続いた…先に沈黙を破つたのは楓だつた。

「…優紀。本当の事言つていい？」

「な、なに？」

「…かわいすき…俺以外には見せるなよつ…つて俺何言つてんだ…」

えつ…?

あたしの聞き間違いだと思つて、嬉しい言葉…また顔が熱くなる。
なんで楓はこんなに素直に言えるんだろう。あたしも、勇気を出した…

「楓もカッコいいよ…」

今日のあたしはおかしい…この前まで、あんな関係だったのに…楓の言葉に、行動に、あたしはどうぞんざに惹かれてくる。

「やつこえぱ、どー行く?」

この空氣を断ち切るよつとあたしは聞いた

「あつ。俺行きたい」というのがあるんだ。いい?」

「いいよ。どーなの?」

「着いてからのお楽しみ。楽しみにしてよー。」

あたしたちは、駅に向かい電車に乗り、すこし町から離れたところに来ていた。

「こんなところがあるの?」

楓に聞いてみた。

「わづひよつと待つて。あと少し」

「……うん。」

楓が立ち止まる。

「優紀。ちょっと、目閉じて」

あたしは言われた通り両を閉じた。

「今日の優紀、素直だね。じゃ、ちょっと歩くよ」

また、顔が熱くなつた。楓に手を引っ張られ少し歩く…

「いいよ。あけて…」

あたしはゆっくりと両を開けた

「うわあーー！」

そこにはクローバーがいっぱいの草原が広がっていた。

誰にも言つていながら、誰にも見つからぬいし。本当の優紀でいらっしゃるでしょ

「……なら、誰にも見つからぬいし。本当の優紀でいらっしゃるでしょ？」

「……えつーー？」

信じられない言葉だった。

あたしを気遣つていいとこでくれた」と、あたしは胸がいっぱいになり。

泣いてしまつた。

「どうしたの？ 優紀？」 なんといふじやいやだつたー？

楓は突然泣き出したあたしに驚いてるようだつた。

ううん。うれしくて、楓ありがとう。

その時、あたしは楓に引き寄せられ気付いたら腕の中にいた。今日はイヤじやない…

「優紀がどうして男装してるかなんて俺からは聞かないから。でも、辛くなつたら俺がまたここに連れてきてあげる……」

「うん」

あたしはしばらく楓の腕の中で泣いていた。

どれくらい時間が過ぎただろうか…泣き疲れたあたしは楓の腕の中で眠ってしまった。

たぶん、昨日眠れなかつたせいもあるんだろうけど……

「優紀？起きたの？」

上から優しい声がした。

「『』めんね。寝てたみたい……」

あたしは恥ずかしくなつて楓から離れた。

「いいよ。優紀の寝顔見れてラッキーだつたし」

そこには意地悪な楓がいた。でも、この今までの嫌な感じはしない…

「ねえ。楓…」

「…ん？」

「あたし楓と付き合つてもいいよ…」

「…うん。…！？えつ！？優紀、今、なんて…！」

「…楓、あたしと付き合つてください。でも、学校では今まで通り、男のあたしと。女の楓ね。他の女の子たちに本当の楓知られたくないし…」

自分でも大胆なことを言つてるのはわかつていた。でも、今は素直な気持ちが言いたかつた…

「本当に…？俺でいいの？俺まぢで嬉しいんだけど…」

「うん。」

「ひつて、あたしたちが付き合つことになつた。」

その後、携帯の番号を交換した。

「ねえ。楓、なんでここにしたの？まわりに人がいないとこなら他にもあつたんじゅ」

「ああ、実は…恥ずかしいんだけど俺、クローバーが好きなんだよね／＼／日向に聞いて、ここにしようつて思つて」

意外な共通点だった。あたしたちはクローバーに引き寄せられてたのかな？

「実はあたしもだよ。ビックリだね！」

「うそ！？まさかよつ！すっげー偶然。運命だよー！」

こんな恥ずかしいことを言えるくらい楓は本当に嬉しそうにしていた。

そして、あたしたちは帰る時間までいっぱい話をした。

あたしが男装している理由。楓が女装してる理由をお互いに話し合つた。

まつ、楓の理由にはあきれたけどね（笑）

楓は、あたしの話を真剣に聞いてくれた。あたしの辛さをわかつてくれた。おかげで、少し強くなれた気がした。

帰りの電車の中で、楓がいきなり言つてきた。

「にしても意外だつたなー」

「なにが?」

「だつて、学校で副会長の時の優紀は、無口だし。女子はともかく、男子ともつぬまないじやん」

「こんなに話すやつだとは思わなかつた。まつ、俺はこいつの優紀が好きだけじねー」

「また…／＼好きと書いた言葉に慣れていないあたしはすぐに恥ずかしくなる。

それに「好き」と素直に言える楓が羨ましいな…

「だつて、もしもぼれたとき誰も傷つけないじやん」

「実は、優しいのな優紀つて…」

「失礼な。あたしはいつも優しくいよ。」

「あはは。やっぱ優紀いいわ。」

そんな話をじてる時、ふと思つ出したことがあつた…

「あーつー。」

「な、何…? ひるをこよ優紀」

「「めん。じゃなくて、楓、始業式の日の放課後のアレ… あたしのファーストキスだったんだからね。」」この結果になつたからいいけど… //」

「「うそっー。」」めんな。あれは本当にあると思わなくて…」

楓は本当に申し訳なれそうにしていた。

チユツ！

「…ツ／＼え、優紀？」

「もういいの、これがあたしのファーストキスってことにするから」

恥ずかしかったけど、これでチャラにしてあげるよ。

こんな話をあたしたちはずつとしていた…

駅に着いて、家の前まで送つてもらつた

「早かつたな…。」

楓の言葉通り今日はいろいろあつたし、好きな人と一緒に入れたから時間はあつとこつ間に過ぎた。

「「うだね。また、明日から副会長と上木さんだね」

「そうだな。まだ、信じられないよ。優紀と付き合えるなんて…」

「あたしもだよ。でも、学校では話せなくとももうメールできるし

ね

帰るのは辛かつたけど。昨日までのあたじじゃないからなんでも出来る気がした。

「じゃあ、また明日ね…」

「ああ。帰つたらメールする。また明日…」

寂しいのをこらえて家に入った…

こいつて、あたしの長い一日が終わった…

帰り道、今日の出来事を思い出した。

（楓サイド）

「なんか、いろいろあったなあ…」

まさか、付き合ひになるとになるまで思わなかつたし…それに今日はいろんな優紀を見れた…

思い出すだけで、顔がにやける。

早く帰つて優紀にメールしよ！俺は、走つて家まで帰つた。

-初テート-（後書き）

優紀と楓の『出会い～付き合ひ』までのお話をしました。
ここまで読んでくださってありがとうございます。
これから2人については「クローバー・2」で現在連載中です。
よかつたらじご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4489p/>

クローバー

2010年12月20日21時11分発行